1　ヨーロッパにしかない時代、中世

さて、次は中世です。この中世という時代は一癖も二癖もある、なかなか捉えづらい時代です。ではさっそくですが、またしても質問です。

問3．「中世」とは何か？　簡潔に説明せよ。

みなさんはどのように考えたでしょうか。では、正解です。

中世は「キリスト教」と「地方分権」の時代である。

いたってシンプルな解答に呆気にとられたかもしれませんが、中世はこの2つのキーワードから捉えることができます。

ところで読者のなかには、「キリスト教」というキーワードに違和感を覚えた方もいるかと思います。「だったら（キリスト教伝来前の）アジアなどの中世はどうなるんだ？」と。この疑問は至極当然で、かつ根本的な問いでもあります。例えば中国史や日本史などでは、中世という時期をどこに設定するかという問題が、いまだに論争となっています。

それもそのはずで、元来「中世」という言葉は西洋史、すなわち欧米の歴史学で用いられている用語であり、これを他地域の歴史にも当てはめようとするために、どうしても「ずれ」が生じてしまうのです。このことから、「キリスト教」と「地方分権」というキーワード、すなわち「中世」という時代は、「西ヨーロッパのみに見られる限定的な時代である」というべきなのかもしれません。少なくとも高校・大学受験の世界史では、中世は極めて限定的で、ローカルな時代であると捉えたほうが適切です。

さらに踏み込むと、実はこの中世という時代は「ヨーロッパが誕生した時代」ともいえるのです。逆にいえば、古代には「ヨーロッパ」という世界あるいは文化圏は存在していなかったとも考えることができます。だからこそ、中世を理解することは、以降の西洋史全般を理解するうえで必要不可欠であるといえます。ヨーロッパという世界・文化圏の秘密が、中世に隠されているというわけです。

では、なぜ中世は「キリスト教」と「地方分権」の時代なのか？　その理由は、中世初期にヨーロッパで立て続けに起こった、2度の民族大移動にあります。

2　2度の民族大移動が中世を作った

ヨーロッパは4世紀から11世紀にかけて、大小様々な民族大移動に見舞われます。このうち主要なものが2回あります。1回目が「ゲルマン人の大移動」、2回目が「第二次民族大移動」です。先に結論をいってしまうと、ゲルマン人の大移動によってキリスト教が、第二次民族大移動によって地方分権が、それぞれ確立することになります。

ゲルマン人の大移動により、「キリスト教の時代」を迎えた

では中世のひとつ目のキーワード、「キリスト教」について解説します。とりわけ中世初期では、キリスト教は国家運営になくてはならないものとなります。4世紀に、ライン川・ドナウ川（ローマ帝国の北方の国境）の北に居住していたゲルマン人が、ローマ帝国の領域へと南下を始めます。こののちまもなく、ローマ帝国は東西に分裂し（395年）、476年に西ローマ帝国が滅亡してしまいます。ゲルマン人の様々な部族はローマ帝国の各地に移住し、西ローマ帝国の領域に自分たちの王国を建設します（図21）。

図21　ゲルマン人の諸王国（500年頃）

このゲルマン人たち、実はこの時点でキリスト教に改宗している者も少なくありませんでした。ゲルマン人の元来の信仰といえばゲルマン神話で、今日われわれが知るところの北欧神話の原型となったものです。しかし、ローマ帝国との接触が増えたことで、3世紀頃よりキリスト教がゲルマン人の間でも広まりつつありました。ただし、4世紀にローマ教会から異端とされたアリウス派が主流でした。

ゲルマン人の大移動により、異端であるアリウス派のゲルマン人たちが、西ヨーロッパ各地に王国を建てたことで、アリウス派は勢力を強めることにもなりました。正統とされたアタナシウス派を奉じるローマ教会にとっては由々しき事態といえます。かつての西ローマ帝国の教

会で最高位にあったローマ教会は、文字通りローマにありますが、西ローマ帝国という保護者（ここでは外敵から身を守るボディガードのようにイメージするとわかりやすいでしょう）を失い、さらに異端のアリウス派が勢力を強める現状をどう打開するか、対策を練ることになります。

教会と手を組んだフランク王国

さて、これらゲルマン人の王国は、いずれも短命なものばかりでした。その最大の理由は、ゲルマン人たち自身にあったといえます。彼らはそもそも、それまで国家、とりわけ領域国家を形成したことがなかったのです。第Ⅱ部第1章でも述べましたが、地方統治に欠かせない「徴税システム」、すなわち「官僚制」が、どのゲルマン人の国家にも欠如していた、あるいは不十分だったのです。

ざっくりいえば、王国の各地から効率よく税を集めることができませんでした。だからこそゲルマン人たちは、自分たちの王国を維持することが困難だったわけです。では、どうやって官僚制を作り出すか？　そんなゲルマン人の国家のなかでも、頭ひとつ飛び抜けた国家が出現します。それがフランク王国です。

フランク王国が台頭した理由は、彼らが教会、正式にはローマ教会に協力したことにありました。フランク王国でももちろん官僚を必要としたのですが、官僚となるには高度な教育を受ける必要があります。とくに教育がいわば贅沢品であった前近代では、「文字の読み書きができるかどうか」という条件ひとつとっても、官僚のハードルはかなり高いのです。

そこでフランク王国では、自国の教会の聖職者に注目したのです。聖職者は文字の読み書きができます。なぜかといえば、彼らは聖書を読む必要があるからです。またフランク王国は、他国と比べてもローマ教会の協力を得やすい立場にありました。フランク王国の初代国王であるクローヴィスが、異端であるアリウス派の信仰を捨て、わざわざローマ教会で正統とされたアタナシウス派に改宗したからです。というわけで、フランク王国では、ローマ教会の聖職者が国政に協力することで（いわば官僚制を補完することで）、他のゲルマン諸国を差し置いて台頭していくことになります。

いわゆる教科書的な記述では、「フランク王国では、クローヴィス王が正統派のアタナシウス派に改宗したことで、ローマ系住民の支持を得て、王国の礎を築いた」となるのですが、より詳細に見れば、ローマ教会の聖職者を利用して官僚制を構築しようとしたわけです。さらにローマ教会とフランク王は、単純な持ちつ持たれつにとどまらない、非常に緊密な関係を育んでいくことになります。

そこで図22をご覧ください。まず、フランク王国は周辺のゲルマン人の王国と戦争をしながら勢力を拡大していきます。本来であればこの戦争はフランク王国による侵略に過ぎない

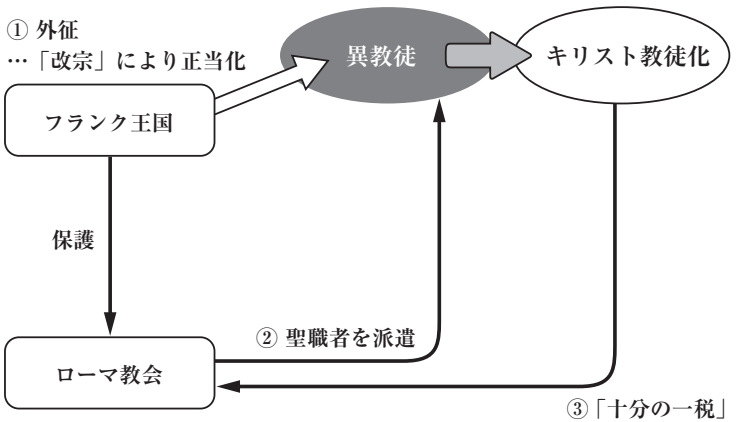

図22　ローマ教会とフランク王国の関係

のですが、これにローマ教会がお墨付き、すなわち「聖戦」というよりどころを与えます（①）。フランク王国と戦うゲルマン諸国はアリウス派、すなわちローマ教会から見れば異端（もしくは異教徒）です。したがって、ローマ教会は、フランク王国の戦争に「正しい信仰に導く戦い」として道義的な目的を与えたのです。

さらにフランク王国には、より目に見える利点がもたらされます。フランク王国の占領地には、ローマ教会から聖職者が派遣され、正統派の布教を進めます（②）。つまり戦後処理です。ローマ教会が代わって戦後処理まで引き受けてくれるため、フランク王国にとっては手間がかからないことこの上ないのです。

ここだけ見ればローマ教会が至れり尽くせり、といったところですが、ローマ教会にも当然ながら見返りはあります。それは何といって

も「アタナシウス派（ローマ＝カトリック）の信者が増える」ということです。信者が増えることの最大の利点は、信者から「十分の一税」という税を徴収できることです（③）。「十分の一税」とは、おもに農民たちの収穫物の10分の1を、地元の教会が徴収していた税（さらに最終的にはローマ教皇の手に届きます）ですから、ローマ教会にとっては収入の増加が見込めたわけです。

このように、フランク王国はローマ教会と密接な関係を築いて勢力を拡大し、またローマ教会（ここからはローマ＝カトリックと呼びます）もアタナシウス派の布教、さらには税収の増加もあって、その影響力を増していきます。